

ラナジット・グハと「サバルタン」 -サバルタン研究の方法論に関する一考察-

メタデータ	言語: jpn 出版者: 明治大学大学院 公開日: 2020-11-27 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 牧, 杏奈 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10291/21274

ラナジット・グハと「サバルタン」 ——サバルタン研究の方法論に関する一考察——

Ranajit Guha and ‘Subaltern’: A Study on the Methodology of Subaltern Studies

博士後期課程 政治学専攻 2018年度入学

牧 杏 奈
MAKI Anna

【論文要旨】

本稿は、『サバルタン・スタディーズ』の創刊者であるラナジット・グハに着目し、サバルタン研究の意義について検討したものである。サバルタン研究は、従属的な立場にある人々を単に観察したり分析したりする研究ではない。グハは、批判的な視座を根幹に持ち、批判的言説分析という手法をとることで、歴史記述の中で人々がサバルタンたらしめられる構造を明らかにしており、この点においてサバルタン研究の意義があると考えられる。本稿では、エリート主義的歴史記述によって曲解された“民衆”がエリートによる支配や統治に権限を与えるイデオロギーの強化に利用されていることへと向けられたグハの批判的な視座と、そうしたエリート主義的歴史記述における言説性——権力と強く結びついた構造——を暴く批判的言説分析というグハの手法について考察する。

【キーワード】 サバルタン研究, ラナジット・グハ, 民衆, 従属性, 権力関係

はじめに

「20世紀における最も創造的なインドの歴史学者」¹であるラナジット・グハは、南アジア近代史の領野における全く新しい研究プロジェクトを始動させ、1982年に雑誌『サバルタン・スタディーズ』(*Subaltern Studies: Writings on South Asian History and Society*)を創刊した。雑誌名か

¹ Amartya Sen, “Foreword,” in Ranajit Guha, *A Rule of Property for Bengal* (Durham and London: Duke University Press, 1996), p. ix.

ら「サバルタン研究」と称されるこのプロジェクトは、エリートの立場から描かれてきた南アジア近代史を鋭く批判し、非エリートである民衆を「サバルタン」と位置づけることで、従来の歴史に取って代わるサバルタンの歴史を打ち立てようとした。このグハによるサバルタン研究が、本稿の主題である。サバルタン研究とはどのような研究であり、いかなる意義を持つのか。こうした問いへの明確かつ注意深い答えを求めて、本稿はこれまで日本で注目されることの少なかったグハの論考に焦点を当て考察を進める。本論に入る前に、以下では、サバルタンという言葉、サバルタン研究、そしてグハに関する基本的な事柄を整理しておく。

まず、サバルタンという言葉についてであるが、一般的に、社会科学の領野で「従属的な立場にある個人や集団」を指す言葉として使用されている。そもそもこの言葉は、アントニオ・グラムシが1934年に記した論考の中で用いた術語であり²、グハが『サバルタン・スタディーズ』第1巻の序文において、グラムシによる歴史研究の手法³を手引きとする旨を記し⁴、南アジア近代史研究にサバルタンの概念を移植した。本稿がサバルタンに着目する理由は、この言葉によって、民衆やプロレタリアートといった言葉では表しきれない権力関係の複雑さや多様さを描出することが可能になると考えられるからである。つまり、サバルタンの概念を理解することは、権力関係の様相を従来とは異なる視点から捉え直すことに繋がると期待できる。従属性という政治学で論じられるべき性質を指示する言葉であるにもかかわらず、今日の日本での政治学的な議論においてサバルタンが主題となることは極めて稀であるといわざるをえない。そのため、サバルタンの概念を学ぶことで政治学の領野におけるサバルタン研究の土壌をつくる必要があると考えられる。

次に、サバルタン研究について、その展開と今日的状況を概説する。『サバルタン・スタディーズ』は、2008年のプロジェクト解散⁵へと至るまでに12巻刊行された。このプロジェクトについてしばしば指摘されることは、時代の変化とともにその方向性も変わったということである。こうした指摘の中で示されるサバルタン研究の歩みは、以下のとおりである⁶。まず、第1～4巻までは、史料の読み直しや新史料に基づいた実証的な歴史研究が中心であり、インドにおける下からの歴史（history from below）の試みとしてのサバルタンの歴史の構築に重点が置かれていた。しかし、ガヤトリ・C・スピヴァクが第4巻〔1985年刊〕に寄稿したサバルタン研究の方法論に対す

² グラムシの「サバルタン」概念について詳しくは、アントニオ・グラムシ（松田博編訳）『グラムシ『獄中ノート』著作集 VII 歴史の周辺にて「サバルタンノート」注解』明石書店、2011年を参照。

³ 「方法的諸基準」において掲げられた6項目がこれにあたる。その内容について詳しくは、アントニオ・グラムシ（上村忠男編訳）『知識人と権力』みすず書房、2011年、112頁を参照。

⁴ Ranajit Guha, “Preface,” in Ranajit Guha ed., *Subaltern Studies I: Writings on South Asian History and Society* (Delhi: Oxford University Press, 1994a), p. vii. 以下、SSと略し、ローマ数字は巻数を示す。

⁵ Dipesh Chakrabarty, “Subaltern Studies in Retrospect and Reminiscence,” *South Asia: Journal of Asian Studies* Vol. 38, No. 1, 2015, p. 11.

⁶ パルタ・チャタジー（栗屋利江・植松歩美訳）『『サバルタン・スタディーズ』略史』『みすず』第51巻、第4号、2009年、12-14頁、白田雅之「サバルタンとは誰か——関係的カテゴリーを目指して——」『創文』第388号、1997年、6-7頁。

る介入的な論考が、プロジェクトの関心を実証的な歴史研究からポストモダン的な言説研究へとシフトさせ、第7巻〔1992年刊〕以降では、そうしたポストモダン的な傾向がより顕著になった。

加えて、プロジェクト内部での方向性の転換とともに、サバルタン研究の学際的な位置づけも変化した。サバルタン研究は、「その当初に対象としていた地理的・政治的領野である南アジアからのいわば「越境」をはたし、第三世界の/における歴史記述の領野での重要な問題構成を提起するまでになっ」た⁷。この「越境」の契機となったのは、1988年に欧米圏で出版された *Selected Subaltern Studies*⁸ である。これは、『サバルタン・スタディーズ』の第1～5巻から11の論考を抜粋してまとめたもので、スピヴァクがグハとともに編者を務め、エドワード・サイードが序文を執筆している。このことから、歴史学的な関心というよりも、ポストコロニアルを主題とする思想的な関心によって、サバルタン研究が世界的に受容されたことが指摘できる。

日本におけるサバルタン研究への注目も「一種のポスト・モダニズム論として現代思想の観点から」出発した⁹。『サバルタン・スタディーズ』の翻訳書¹⁰が出版されたのは、インドでの創刊から16年後のことであり、既にプロジェクトの方向性も位置づけも変化した後であった。そして、これと同年に、スピヴァクの著作『サバルタンは語ることができるか』の邦訳が出版された¹¹。加えて、翌年の1999年には『現代思想』で「サバルタンとは誰か」と題したスピヴァク特集号が組まれており、現代思想における一つの先駆的な概念としてサバルタンが理解されたことがうかがえる。

こうした経緯——プロジェクトの転換や「越境」——のために、サバルタン研究における南アジア近代史研究という側面とポストモダン的な言説研究という側面は、対立するものとして論じられることが多い¹²。たしかに、プロジェクト全体を総括的に捉えると、初期にみられた実証的な歴史研究が、ポストモダン的な言説研究に取って代わられたという構図が当てはまる。しかしながら、グハの論考に着目すると、歴史研究と言説研究は対立関係にあるわけではなく、サバルタンの歴史を打ち立てるという目的のために、この二つの側面が融合されている。これこそが、本稿でグハを主題とする理由である。サバルタンの概念が、とりわけ日本では、スピヴァクの議論を出発点として理解されてきたために、グハによるサバルタン研究への関心はこれまで概して薄いままであっ

⁷ 崎山政毅「文体に抗する「文体」——サバルタン研究の批判的再考のための覚書——」『思想』第866号、1996年、147頁。

⁸ Ranajit Guha & Gayatri Chakravorty Spivak eds., *Selected Subaltern Studies* (New York: Oxford University Press, 1988).

⁹ 竹中千春「訳者あとがき」（ラナジット・グハ、ギャーネンドラ・パーンデー、パルタ・チャタジー、ガヤトリ・チャクラヴォルティ・スピヴァク（竹中千春訳）『サバルタンの歴史 インド史の脱構築』岩波書店、1998年所収）、354頁。

¹⁰ ラナジット・グハ、ギャーネンドラ・パーンデー、パルタ・チャタジー、ガヤトリ・チャクラヴォルティ・スピヴァク（竹中千春訳）『サバルタンの歴史 インド史の脱構築』岩波書店、1998年。この翻訳書は、SS I～IVのうちの5つの論文と、グハによるSS Iへの序文を抜粋したものである。

¹¹ ガヤトリ・チャクラヴォルティ・スピヴァク（上村忠男訳）『サバルタンは語るすることができるか』みすず書房、1998年。

¹² 例えば、栗屋利江『「サバルタン研究」再考——インド近代へのまなざし——』『創文』第376号、1996年。

た。しかし、グハがプロジェクトの創始期に既に言説分析の手法——本稿ではこれを「批判的言説分析」として定義する——をとり、サバルタン研究の方法論に関して重要な指針を示していることから、グハの論考を通じてサバルタン研究の意義について考えることが必要であるといえる。

最後に、ラナジット・グハという人物について簡潔に述べておく¹³。グハは、1923年に現在のバングラデシュに位置するバイカーガンジ (Bakarganj) 地区のシダーカティ (Siddhakati) 村に生まれた。1938年、ベンガルの名門校であるプレジデンシーカレッジに入学し、同時にインド共産党に入党している。1946年にカルカッタ大学で修士号 (歴史学) を取得した後は、インド共産党の日刊紙のスタッフとして勤務し、その翌年には、党の代表としてパリの世界民主成年連盟の事務局に派遣され、1953年に帰国するまでパリで活動していた。しかし1956年、ソ連によるハンガリー侵攻に反対し、インド共産党を離党。その後、イギリス、インド、そしてオーストラリアへと拠点を移しながら研究を続け、プロジェクトの創設と雑誌の創刊に至る。『サバルタン・スタディーズ』へは、「植民地インドにおける歴史記述の諸相について」 (“On Some Aspects of Historiography of Colonial India”) [1巻: 1982年刊], 「反—暴動の文章」 (“The Prose of Counter-insurgency”) [2巻: 1983年刊], 「チャンドラの死」 (“Chandra’s Death”) [5巻: 1987年刊], そして「ヘゲモニーなき支配とその歴史記述」 (“Dominance Without Hegemony and Its Historiography”) [6巻: 1989年刊] を自ら寄稿した¹⁴。第6巻を最後にグハは編者を退任したが、その後も精力的に研究を続けている¹⁵。

本稿は、『サバルタン・スタディーズ』の刊行に係る1970年代から1980年代にかけてのグハの研究に着目し、サバルタン研究の意義について考察する。本稿の構成は、次のとおりである。まず、サバルタン研究の根幹を成す、エリート主義へと向けられたグハの批判的な視座に着目し、その批判の内容と視座の源泉を探る。次に、批判的言説分析を特徴とするグハのアプローチに焦点を当て、下からの歴史のアプローチとの比較も通じて、サバルタン研究の方法論的な独自性を検討する。グハによるサバルタン研究を特徴づける批判的な視座及び批判的言説分析の手法を知ること、サバルタン研究が備える批判性と闘争性を素描し、その意義を明らかにすることを試みる。

¹³ Partha Chatterjee, “Editor’s Introduction,” in Partha Chatterjee ed., *The Small Voice of History* (Ranikhet: Permanent Black, 2018), pp. 2–13.

¹⁴ 「植民地インドにおける歴史記述の諸相について」及び「反—暴動の文章」は、前掲『サバルタンの歴史インド史の脱構築』に所収されているが、それぞれ「植民地インドについての歴史記述」、「反乱鎮圧の文章」という訳があてられている。本稿では、原文の意味合いにより近くなるよう別の訳をあてた。とりわけ、「反—暴動の文章」に関しては、グハが必ずしも反乱を鎮圧する側によって書かれた文章だけを取り上げているわけではない (詳しくは本稿第1章第2節を参照) ことに加え、歴史記述にみられる「反—暴動のコード」 (“the code of counter-insurgency”) という独特の文法が鍵概念として論じられていることから、このような訳を採用した。

¹⁵ グハは、編者退任後、SS IX [1993年刊] に “The Small Voice of History” を寄稿。また、2002年には *History at the Limit of World-History* (New York: Columbia University Press) (竹中千春訳『世界史の脱構築：ヘーゲルの歴史哲学批判からタゴールの詩の思想へ』立教大学出版会、2017年) を出版。

第1章 サバルタン研究の根幹——グハの批判的な視座

サバルタン研究は、南アジア近代史がエリートの立場から語られてきたことに対する批判から出発し、支配的なエリート主義的歴史記述に対抗するサバルタンの歴史を新しく描こうとするプロジェクトであった。グハは、『サバルタン・スタディーズ』第1巻に寄せた序文の冒頭において、サバルタン研究の目的は「南アジア研究におけるサバルタンをテーマとした体系的で学識ある議論を促すことによって、この特定の領野における多くの研究や学術活動に特有のエリート主義的な偏向を正すこと」であると宣言し¹⁶、エリート主義に対する批判的な視座がプロジェクトの根幹を成すことを明示している。そして、この批判的な視座は、極めて強い口調で表現されていることが指摘できる。例えば、グハは先ほどと同じ序文の中で、「エリート主義及びそれに対する闘争 (combat) の必要性について関心を抱いているのは我々だけではないと信じている」と述べ、「闘争」のプロジェクトとしてのサバルタン研究への参加を読者に呼びかけている¹⁷。さらに、別の論考では、エリート主義的歴史記述との「闘争」についてより詳しく、次のように述べられている¹⁸。

(前略) 我々は、インド・ナショナリズムに対するうわべだけで非歴史的な一元論を拒否し、エリートの政治の領域とサバルタンのそれとの共存関係及び相互作用について認識することによってオルタナティブな言説を発展させ、それによりエリート主義的歴史記述と決然と闘うべきであるということを確認した。

ここでは、従来の南アジア近代史研究においてインド・ナショナリズムを描写するエリート主義的歴史記述が、「うわべだけ」であり、「非歴史的」であり、さらには「一元論」であると徹底的に攻撃されており、加えてこれと「決然と闘う」ことが宣言されている。こうした表現からわかるとおり、グハのエリート主義に対する批判は極めて辛辣なものであった。そして、その視座は、サバルタン研究がエリート主義的歴史記述に対抗する闘争的な歴史記述を構築するプロジェクトとなるための原動力や結束力として機能していたといえる。

では、サバルタン研究が打倒しようとした、南アジア近代史の領野におけるエリート主義的な歴史記述とはどのようなものであり、いかなる問題を抱えていたのだろうか。また、グハは、このエリート主義に対する批判的な視座をどこから得たのだろうか。以下では、グハによるエリート主義の分析及び批判を整理した上で、その批判的な視座の源泉を探る。

¹⁶ Ranajit Guha, op. cit., p. vii.

¹⁷ Ibid., p. viii.

¹⁸ Ranajit Guha, "On Some Aspects of the Historiography of Colonial India," SS I, 1994b, p. 7.

1. 南アジア近代史の支配者——エリート主義的歴史記述

グハは、「植民地インドにおける歴史記述の諸相について」の中で、南アジア近代史に特徴的なエリート主義とその歴史記述の様相について論じている。それによると、インド・ナショナリズムの歴史記述を長く支配してきたのは、「植民地主義的エリート主義とブルジョワ民族主義的エリート主義」という二つのエリート主義であった¹⁹。サバルタン研究のアイデアが醸成された1970年代の南アジア近代史研究について、プロジェクトのメンバーの一人であるパルタ・チャタジーは、「主にイギリスのケンブリッジを拠点とする歴史家グループと、主にデリーを活動の場とする歴史家グループとの間で」の論争が支配的であったと述べ、前者がグハのいうところの植民地主義的エリート主義に、後者がブルジョワ民族主義的エリート主義にあたると説明している²⁰。しかしこれは、グハのエリート主義批判がそうした同時代的な歴史研究に対する批判に留まることを意味しない。グハの別の論考、「ヘゲモニーなき支配とその歴史記述」をみると、二つのエリート主義的歴史記述はどちらも、植民地インドの歩みと同じだけの長い時間の中で構築されたものであることがわかる。では、グハの批判の矛先にあるエリート主義とはいかなるものであったのだろうか。

まず、植民地主義的エリート主義の歴史記述に関して、グハはその伝統の起点を、イギリス東インド会社がムガル帝国での徴税・財政権を獲得した1765年に置いている²¹。この議論によると、イギリス東インド会社は当時、土着の権力者に代わって徴税を行うために土地所有の構造を知る必要があったが、その構造は極めて複雑であったため、それを認識するには「長い時間をかけて蓄積された権力関係を把握しなければならなかった」。そこで、州財務長官が「歴史家の機能も果たすこととなり」、その結果、「強権的だが未熟な官僚主義的関心に基づいた、英語で記された地方史」が出来上がった。そしてグハは、この初期の歴史記述を、「イギリスの手によるインド史におけるエリート主義的な偏向の最初の種 (species) の一つである」と論じている。したがって、植民地主義的エリート主義の歴史記述は、植民地支配への関心と密接に結びつくかたちで、200年以上にもわたって構築されてきたものであるといえる。

一方で、グハの批判的な視座は、植民地インドにおいて絶対的な権力を誇ったイギリスの植民地主義的エリートに対してのみならず、その対抗者であったインドの民族主義的エリートに対しても向けられている。イギリスによる支配を批判する民族主義的なインド人エリートも、グハのマルクス主義的な見地からすればブルジョワジー以外の何者でもなく、したがって民族主義の立場から描かれた歴史記述もエリート主義的な構築物にはかならなかった。グハは、以下の引用のとおり、ブルジョワ民族主義的エリート主義の歴史記述の始まりを、植民地主義的エリート主義のそれとの連

¹⁹ Ibid., p. 1.

²⁰ 前掲『『サバルタン・スタディーズ』略史』9頁。また、当時のケンブリッジ学派によるインド近代史研究については、栗屋利江「インド近代史研究にみられる新潮流——「サバルタン研究グループ」をめぐる——」『史学雑誌』第97巻、第11号、1988年において詳述されている。

²¹ Ranajit Guha, “Dominance Without Hegemony and Its Historiography,” SS VI, 1994c, pp. 210–211.

動に見いだし、ゆえにその伝統もまた、植民地インドと同じだけの歩みを持つことを示している²²。

（前略）征服によって過去を流用すること（appropriation）は、征服者に対する反発を招くリスクを伴う。それは、（征服された側の人々が——引用者）自らの過去を神聖化し、そして彼ら自身のアイデンティティを定義したり肯定したりするために、そうした過去を利用するということを促す結果になりうる。これこそが、疑いようもなく、本議論が扱う事象に際して生じたことであり、流用された過去は、植民者にとっての他者を示す記号として機能するだけでなく、皮肉なことに、被植民者にとっての他者を示す記号ともなった。被植民者の側においては、支配者の意図とは反対の意図を基に過去を再構築し、それを文化的・政治的用語における差異を創りだすための根拠とした。歴史は、したがって、外部の植民地主義的プロジェクトによる流用と、インドの土着の民族主義的プロジェクトによる反一流用（counter-appropriation）の、二者間で争われるゲームとなった。

植民地主義者による過去の「流用」も、ブルジョワ民族主義者による過去の「反一流用」も、どちらもインドにおける彼ら自身の支配や権力の正当性を示すためのものであった。そのため、両者ともに支配と権力を志向するエリート主義的な偏向からは逃れられず、長い歳月をかけて、南アジア近代史におけるエリート主義的歴史記述が構築されることとなった。

加えてグハは、この二つのエリート主義が対立関係にあると同時に、自由主義のイデオロギーを共通の土壌とすることを指摘している²³。グハによると、「敵対者である植民地主義自体によって生み出され育まれたインドの土着のブルジョワジーは」、植民地主義から与えられた自らの政治的キャリアに満足し、「帝国主義との幸せな共存状態」にあった。そのため、彼らが「植民地国家の破壊」を志向することはなく、むしろ「イギリスの支配権力と対峙するあらゆる形態の武装闘争」に「断固として反対」し、「権力交渉の主要な戦術的手段として、圧力政治に決着した」。さらにグハは、以下のように続けている²⁴。

妥協と適応は、等しく、インド社会に定着した半封建的価値と制度に対する彼ら（インドのブルジョワジー——引用者）の態度の特徴である。彼らが公言した自由主義は、植民地政権が發布した改革への中途半端な主導権の限界を超えるほど強力なものにはなりえなかった。この月並みな自由主義は、西洋でブルジョワジーが興隆した際にみられた活発な民主的文化の風刺画であり、植民地時代を通じて、インドで依然として活発な半封建的文化の勢力との共生関係にあった。

²² Ibid., p. 212.

²³ Ibid., pp. 213–214.

²⁴ Ibid., p. 214.

グハが捉える植民地インドにおけるエリート主義の構図を整理すると、まず、絶対的な支配エリートであるイギリスの植民地主義的エリートの存在があり、それに対抗するかたちで自らの支配権力とアイデンティティを主張するインドの民族主義的エリートが存在した。彼らは互いに対立しているかのようにみえるが、植民地主義的エリートは、自由主義のイデオロギーと諸制度を植民地インドにもたらすことによって、民族主義的エリートに権力を与えるとともにそれを保持させる機能を果たした。また、民族主義的エリートは、自由主義のイデオロギーを受容し、植民地主義が築いた政治制度の内部で権力を確立しながら、一方では民族主義のイデオロギーによって土着の半封建的な権力も保った。この二つの勢力の双方が南アジア近代史にもたらした歴史記述は、互いに批判し合いながらも、支配と権力への関心に貫かれたエリート主義的な視座から逃れることはなかった。

2. エリート主義的歴史記述の過ち——“民衆”の曲解

支配と権力を志向するエリート主義的な偏向は、南アジア近代史にどのような言説をもたらしたのだろうか。また、グハが「非歴史的」とであると批判したそれらの言説は、どのような過ちを犯していたのだろうか。グハは、前述した二つのエリート主義が、インドという国家の形成やインド・ナショナリズムという意識の発達を、エリートによる偉業であると考えていると指摘し²⁵、そうした考えに基づく歴史記述は、民衆による貢献を認識したり解釈したりすることに失敗しているのだと論じている²⁶。

二つのエリート主義によるインド・ナショナリズムに対する認識と解釈について、グハの主張をまとめると、次のとおりである²⁷。まず、植民地主義的エリート主義の歴史記述は、インド・ナショナリズムを「植民地主義によってもたらされた制度、機会、資源」といった「刺激」に対するインド人エリートの「反応」としての「活動や思想の総計」とであるとみなす。したがって、インド・ナショナリズムは、インド人エリートによる「学習プロセス」——植民地当局が統治のために導入した機構、制度、文化などを学ぶプロセス——として説明される。加えて、インド人エリートがこの学習プロセスを経たのは、国家の利益といった「高尚な理想主義」のためではなく、「植民地支配に付随した富、権力、名声といった報酬に対する期待からであった」と語られる。グハは、「そうした報酬を獲得するためのインド人エリート間での協力や競争といったものが、インド・ナショナリズムを構成していると、我々は教わってきた」と論じている。一方、ブルジョワ民族主義的エリート主義の歴史記述は、インド・ナショナリズムを「インド人エリートがインドの人々を征服から自由へと導く理想主義的な語りとして表現する」。その際、実際にはブルジョワ民族主義者の多

²⁵ Ranajit Guha [1994b], op. cit., p. 1.

²⁶ Ibid., p. 3.

²⁷ Ibid., p. 2.

くが植民地体制と協力関係を築いていたにもかかわらず、植民地体制との対立関係が強調される。つまり、「搾取者や抑圧者として」ではなく、「民衆の大義の推進者として」のインド人エリートの役割が語られる。したがって、グハは、ブルジョワ民族主義的エリート主義が描く「インド・ナショナリズムの歴史は、インド人エリートの精神的な伝記のようなもの」とであると論じている。

グハは、これらの「非歴史的な歴史記述が明らかに見落としているものは、民衆の政治である」と述べているが²⁸、「非歴史的な歴史記述」の問題点は、単に「民衆の政治」を見落としているということに留まらない。最大の問題は、エリート主義的な歴史記述が、民衆の行動や意識といったものを自らに都合良くねじ曲げて解釈してきたということにある。グハは、「他の人々も同様に、南アジアの議題を扱う学術活動におけるこの（エリート主義的な——引用者）傾向によって生成される曲解と不均衡（傍点——引用者）について不満に思っている」と主張している²⁹。また、サバルタン研究の意義について述べた箇所では、グハは、サバルタンに着目して研究することは歴史の中でエリートが果たした役割を客観的に評価するだけでなく、その役割に対するエリート主義的な解釈を批判することに繋がると論じている³⁰。さらに、別の論考においても、エリート主義的歴史記述が、植民地の構造を明らかにするだけでなく、歴史記述そのもののイデオロギー的な特性を理解することにも役立つと主張している³¹。これらの言葉からわかるとおり、エリート主義的な偏向によって民衆という存在が誤って解釈されているということを、グハは鋭く批判しているのである。

さらにグハは、歴史記述が中立的で客観的なものにはなりえないということを、ヘイドン・ホワイトを引きながら論じた上で³²、歴史記述とイデオロギーとの関係においては「共犯の機能」が働いていることを指摘し、二つのエリート主義のイデオロギー的な基礎である自由主義に関して、以下のような批判を展開している³³。

世界を変えること、そしてその状態を維持することは、実際、自由主義的歴史記述が自らの代弁する階級に資するための二重の機能であった。卓越したブルジョワジーの言説は、ブルジョワ階級が優勢の時代に、階級の利益に応じて世界を変えたり、少なくとも大幅に修正したり、さらには支配を固めたり永続させたりするのに手を貸した。このように、この歴史記述は、そのすべての根本的なイデオロギーを共有するだけでなく、積極的に広めたのだということができるだろう。この（歴史記述とイデオロギーとの——引用者）共犯の機能は、要するに、自由主義的歴史記述をブルジョワジーの意識それ自体の内部から語らせることだ。

²⁸ Ibid., p. 4.

²⁹ Ranajit Guha [1994a], op. cit., p. viii.

³⁰ Ibid., p. vii.

³¹ Ranajit Guha [1994b], op. cit., pp. 2-3.

³² グハは、Hayden White, *Metahistory* (Baltimore & London, 1983), pp. 21-22 を引用している。

³³ Ranajit Guha [1994c], op. cit., p. 215.

グハは、利己的なエリートが自らに都合よく歴史を語ることを単純に批判したわけではなく、そうした歴史の語りや、実はイデオロギーと密接に結びついているということを暴こうとした。つまり、グハが批判したエリート主義的歴史記述においては、エリート主義的な偏向によって曲解された民衆の意識や政治的行動といったものが、エリートの——個人的あるいは集団的な——権力を強化するための言説に利用されるだけでなく、そうしたエリートの権力の土台となる支配的なイデオロギーとその言説をも強化することに役立てられてしまっているのである。

3. エリート主義批判の源泉——ナクサライト運動

植民地主義的エリートと民族主義的エリートが自由主義という共通のイデオロギーの内部において互いに批判し合いながら南アジア近代史の言説を構築してきた長い伝統の中であって、グハは、その双方をエリート主義であるとする第三の立場からの批判的な視座をいかにして発見したのだろうか。この問いに関して、まずは、サバルタン研究のプロジェクトが始動する前の、グハの初期の研究に目を向けることから検討を始める。

1963年にパリで出版されたグハの最初の著作、*A Rule of Property for Bengal*³⁴では、1793年に東インド会社が導入した永代定額査定（Permanent Settlement）の思想的背景に関する歴史研究がなされている。この第2版に序文を寄せたアマルティア・センが述べているとおり、その研究内容は、サバルタン研究において展開されているものとは概して異なるものであった³⁵。この著作の特徴を挙げると、第一に、フランス革命期における重商主義者、重農主義者、及び自由貿易主義者の思想に関する研究であり³⁶、第二に、そうした思想が植民地統治の実質的な制度へと結実し運用されるまでの歴史的経緯の研究であり、そして第三に、理念から統治制度への移行の失敗——反封建主義的な自由主義思想によって永代定額査定という半封建的な土地制度が植民地にもたらされたということ——についての研究であるといえる。したがって、この時点でのグハの研究は、西洋のエリートに関する研究であり、非エリートであるサバルタンについて論じるものではなかった。

ただし、三点目の特徴にあるとおり、グハは当時からエリートの失敗に目を向けていたことが指摘できる。「いかにしてフランス革命の偉大な賛美者であった人物の思想から1793年の半封建的な土地制度が生みだされたのだろうか」³⁷という問いからは、グハの視点がすでに植民地主義の矛盾を捉えていたことがわかる。しかしながら、それでも、インドの土着の民族主義的エリートを批判する議論はもとより、エリート主義的歴史記述に対抗するサバルタンの歴史を打ち立てるといった試みは、この時点ではみられない。では、歴史記述における権力性を俯瞰的に捉えるサバルタン

³⁴ Id., *A Rule of Property for Bengal* (Durham and London: Duke University Press, 1996) .

³⁵ Amartya Sen, op. cit., p. ix.

³⁶ Ranajit Guha, op. cit., p. 9. グハは、重商主義者として Alexander Dow、重農主義者として Henry Pattullo 及び Philip Francis、そして自由貿易主義者として Thomas Low を取り上げている。

³⁷ Ibid., p. xv.

研究の批判的な視座のアイデアはどこから来たのであろうか。

サバルタン研究というプロジェクトの背景として、『サバルタン・スタディーズ』の訳本³⁸を出版した竹中は、1977年にインディラ・ガンディー政権が「民衆の波 (janata wave)」を前に敗れ、初めての非会議派政権が成立した」ことにより「民衆が政治の舞台に踊り上がる現象」が生じていたことを指摘し、「民衆の歴史がこれまでまったく書かれてこなかったこと、その異様さが指摘されるに至った」と論じている³⁹。加えて、プロジェクトのメンバーの一人であるディベシュ・チャクラバルティは、1960年代から1970年代初頭にかけての世界的な潮流がサバルタン研究の背景にあったと述べている⁴⁰。すなわち、学生運動の隆盛によってもたらされた「グローバルな毛沢東主義」や、先住民をめぐる市民権運動、ベトナムと中国での革命を契機とした「農民」というカテゴリーに関する議論の興隆、フェミニズムからの西洋政治思想に対する疑義の提示、そして西洋諸国におけるデモクラシーをめぐる問題の噴出などが、時代的な背景として挙げられている。したがって、独立後のインドにおいて安定的に中央政権を担ってきた国民会議派の求心力の弱体化だけでなく、国際社会において政治、経済、文化などのあらゆる側面で支配力を保ってきた西洋中心主義に対するオルタナティブな立場からの異議申し立ての活発化が、サバルタン研究のプロジェクトに先鋭的な議論の舞台を用意したといえる。

こうした中でも特に、グハによるサバルタン研究の思想的な背景として、その影響の大きさをうかがえるのが、毛沢東主義である。チャタジーは、グハの論文集 *The Small Voice of History*⁴¹ を編集するに際して著した序文の中で、グハの学問的な転機を以下のように記している⁴²。

1970年から1971年に、グハはガンジーに関する本の執筆のためにインドにやって来た。(中略) デリー大学経済学研究科を拠点としたグハは、そこで毛沢東主義派の学生と接点を持った。ポストコロニアルな今日の状況とのこの出会いが、彼の知的プロジェクトを変えた。彼はガンジーの本を捨て去り、代わりに農民の反乱とインド社会における権力の形成について研究及び思案することを決めた。こうしてサバルタン研究の種が蒔かれた。

ここでは、グハと毛沢東主義派の学生との出会いが、「サバルタン研究の種」として描かれている。ただし、グハと毛沢東の思想それ自体との関わりがどれほど深いものであり、どれだけイデオロギー的な共振があったかは定かではない。しかしながら、サバルタン研究のアイデアの根底に毛沢東の思想や運動からの影響があったことは、グハ自身による2007年のローマでのスピーチの

³⁸ 注10を参照。

³⁹ 竹中千春「平和の主体論 サバルタンとジェンダーの視点から」『平和研究』第42号、2014年7月、7頁。

⁴⁰ Dipesh Chakrabarty, op. cit., p. 12.

⁴¹ Partha Chatterjee ed., *The Small Voice of History* (Ranikhet: Permanent Black, 2018).

⁴² Partha Chatterjee, op. cit., p. 11.

中からもうかがい知ることができる。その内容は、以下のとおりである⁴³。

我々のプロジェクトであるサバルタン研究は、インド共産党及びインド共産党（マルクス主義派）のどちらとも距離を置き続けた。我々にとっては、双方ともインドにおける左翼-自由主義的エリート権力であった。しかし、これは我々が非政治的あるいは反共産主義であることを意味したわけではない。むしろ、我々はマルクス主義者として、南アジアの歴史・社会研究における植民地主義及び植民地主義的な知識をラディカルに批判しようとした。したがって、我々は二つの公式的なインド共産党による日和見のかつドグマ的なマルクス主義の援用に反対した。我々は、中国革命及び毛沢東の思想から着想を得たナクサライト運動として知られる武装農民運動に共鳴した（中略）が、この運動は、1968年から1971年にかけて、会議派と二つの共産党との協力による暴力的な対抗的措置（counter-insurgency operations）によってねじ伏せられた。

グハが「共鳴」を示したナクサライト運動は、インドで古くから頻発していた農民運動の伝統と共産主義的な運動とが接合した「共産主義的農民運動」である⁴⁴。この運動は、1967年に西ベンガル州ダージリン県ナクサルバリ地区で生じた、貧農や茶畑労働者——その多くがサンタル族やオラオン族といった先住部族民であった——を中心とする蜂起を契機として始まった。その背景には、猛烈な食糧不足による困窮、当時の州政権を担っていたインド共産党（マルクス主義派）が公約した土地改革の失敗に対する反感、そして長きにわたって続く地主や富裕農による苛烈な抑圧と搾取に対する抵抗のための結束、といった複合的な社会経済状況があった。インド共産党（マルクス主義派）の急進的な党員によって、毛沢東の思想と戦略を手引きとする農民革命理論が広く伝えられ、ナクサルバリ蜂起に共鳴する農民蜂起がインド各地で60件にも及んで生じた。

グハは、このナクサライト運動を支えた二世代——独立運動時に描かれた理想が実現されなかったことに幻滅した年配の世代と、独立後の社会において将来への期待を抱けない若い世代——がサバルタン研究のプロジェクトを構成しており、運動が一度収束を迎えた1970年代半ばにこの二世代による共同研究が始まったと説明している⁴⁵。したがって、エリート——「二つの公式的なインド共産党」も含む——に対する幻滅や反感というナクサライト運動の遺産が、サバルタン研究の源泉の一つとして重要な役目を果たしたことが指摘できるとともに、グハによるエリート主義に対する批判的な視座の土台には、そうしたエリートが人々——インドの共産党勢力からも弾圧される存

⁴³ Ranajit Guha, “Gramsci in India: Homage to a Teacher,” *Journal of Modern Italian Studies* Vol. 16, No. 2, 2011, p. 289.

⁴⁴ 拙稿「ナクサライト運動史——インドにおける共産主義的農民運動の展開——」『政治経済学研究論集』第3号, 2018年9月, 42-48頁。

⁴⁵ Ranajit Guha, op. cit., p. 290.

在である——を悉く欺いてきたということに対する問題意識や、エリートと対峙し闘争する人々への共感があったのだといえる。

ここまで、グハによるサバルタン研究が、エリート主義的歴史記述による“民衆”の曲解という重大な過ちに対する批判的な視座を持ち、さらにその先鋭的なエリート主義批判の源泉には、グハとナクサライト運動との共鳴関係があることを考察してきた。では、グハのサバルタン研究においては、こうした批判的な視座に基づく議論がいかなる方法論を通じて展開されているのだろうか。次章では、批判的言説分析というグハのアプローチに着目してサバルタン研究の方法論的側面について検討する。

第2章 サバルタン研究の方法論——批判的言説分析

サバルタン研究の創始者であるグハは、独立後のインドで経験したエリートに対する幻滅や反感を源泉とする、エリート主義的歴史記述へ向けた批判的な視座を根幹とし、サバルタンの歴史を打ち立てるプロジェクトを始動させた。では、グハは『サバルタン・スタディーズ』における論考の中で、いかにしてサバルタンの歴史の描出を試みたのだろうか。

グハの論考を検討する前に、本稿の冒頭で言及したサバルタン研究のプロジェクトを巡る二つの通説に疑義を呈することで、本章の議題を明確にしておく。第一の通説は、「サバルタン研究のプロジェクトは、歴史研究から言説研究へと転換した」というものである。そして、第二の通説は、「サバルタン研究のプロジェクトは、南アジアにおける下からの歴史の試みである」というものである。第一の通説に関しては、プロジェクト全体を総括すれば、実証的な歴史研究からポストモダンの言説研究への質的な変化が認められることは確かであるといえるが、しかしながら、グハによるサバルタン研究の論考に着目すると、エリート主義的な歴史記述に取って代わるサバルタンの歴史を打ち立てるという目的のために、歴史研究と言説研究の二つの側面が併せられたかたちで展開されていることが指摘できる。したがって、南アジア近代史研究のプロジェクトとして始動したサバルタン研究は、当初から言説研究の観点を備えたものであったといえる。本章では、歴史研究と言説研究の二つの側面を併せ持つアプローチをとるグハの研究手法について詳しくみていく。第二の通説に関しては、南アジアにおけるサバルタンの歴史も、欧米における社会史の流れに位置づけられる下からの歴史も、どちらも民衆に焦点を当てた歴史構築の試みであるという点で共通していることは確かである⁴⁶。しかし、本稿では、グハによるサバルタン研究におけるエリート主義的

⁴⁶ 『サバルタン・スタディーズ』は、欧米における社会史研究の興隆から多大な影響を受けていた。チャタジーは、次のように述べている。「明らかに、クリストファー・ヒル、E・P・トムソン、エリック・ホブズボウム、あるいは『ヒストリー・ワークショップ』の歴史家たち、さらにはエマニュエル・ル・ロワ・ラデュリといったフランスの社会史家の研究が、サバルタン歴史家たちによって、民衆の歴史を研究するうえでの方法論的な糸口として、熱心に研究された」（前掲『『サバルタン・スタディーズ』略史』12頁）。加えて、チャタジーがいうところの『サバルタン・スタディーズ』の「折衷主義」（Partha Chatterjee, “After Subaltern Studies,” *Economic and Political Weekly* Vol. 47, No. 35, 2012, p. 44）についても、イギリス社会

歴史記述に対する批判的な視座が、前章で示したとおり、“民衆”の曲解へと向けられたものであるのに対し、一方の下からの歴史のアプローチが“民衆”の無視を問題視しているという違いに着目して論じる。この差異は、従来の自由主義的な歴史記述における“大きな歴史”の言説を否定するサバルタンの歴史と、そうした言説を強化するともいえる下からの歴史とを大きく分かつものであると考えられる。本章の後半では、この差異を考察することで、サバルタン研究の独自性を示すことを試みる。

本章では、主に「反一暴動の文章」において展開されている、批判的言説分析を特徴とするグハのアプローチに焦点を当てる。ここでいう批判的言説分析とは、すなわち、エリート主義の視点から構築された歴史記述を批判的に分析し、そこにみられる曲解を暴くことで、権力と強く結びついた言説性を明らかにする研究手法を意味する。グハは、この批判的言説分析を展開することで従来の歴史を否定し、新たに闘争的な歴史記述を構築することを試みた。以下では、グハの研究手法について考察した上で、下からの歴史との比較検討を進める。

1. グハによるサバルタン研究の手法

1983年刊行の『サバルタン・スタディーズ』第2巻に掲載された「反一暴動の文章」の中で、グハは、植民地インドにおいて頻発していた農民反乱を題材とする従来の歴史記述を取り上げ、批判的言説分析を用いた歴史研究を展開している。本節では、この「反一暴動の文章」の議論に沿って、歴史研究と言説研究の二つの側面を併せ持つグハのアプローチについて詳しくみていく。

まず、グハの問題提起を要約すると、次のとおりである⁴⁷。農民は自らの意志に基づいて反乱を起こしてきたのに、従来の歴史記述はそのことを全く理解していない。そこで、なぜ従来の歴史記述がこれほどまでに農民反乱の認識に失敗しているのかを知るために、その記述の構造を丁寧にみる必要がある。ここでグハは、従来の歴史記述を三つの異なる言説に分類する⁴⁸。第一言説は、主に公的な政府文書を指し、反乱が起こったと同時に、反乱を最も恐れる立場にある人々によって書かれたものである。第二言説は、反乱からいくらか時を経て、歴史としてそれを描いたものであり、反乱の目撃者が体験談として書いたものと、官僚が歴史的記録として書いたものを含む。そして第三言説は、主に左翼的な記述を指し、反乱者を支持する立場から書かれていることを特徴とする。

第一言説について、グハはロラン・バルトの議論⁴⁹を参照しつつ、言説が二種類の文節（segments）によって構成されており、それらを分解して分析することで農民反乱がどのように記述さ

史を特徴づける方法論上の「無政府的状况」（松村高夫「イギリスにおける社会史研究とマルクス主義史学」『歴史学研究』第532号、1984年、18-19頁）と同様の傾向として指摘できる。

⁴⁷ Ranajit Guha, “The Prose of Counter-Insurgency,” SS II, 1993, pp. 1-3.

⁴⁸ Ibid., 第一言説については pp. 3-6, 第二言説は pp. 7-8, 第三言説は pp. 27-28 を参照。

⁴⁹ グハは、Roland Barthes, *Images-Music-Text*, p. 102 から「機能」（functions）と「指標」（indices）の議論を援用している。

れたのかを知ることができると論じている。その文節の一つは、反乱について報告する部分であり、もう一つは、それを説明する部分である⁵⁰。第一言説の例として、1831年のバラサト蜂起について書かれた報告書（以下、テキスト I）及び 1855 年のサンタル反乱について書かれた嘆願書（以下、テキスト II）を取り上げたグハは、歴史研究の一次史料としてもしばしば使用されるこれらの文章を報告の部分と説明の部分とに分けることで、「反―暴動のコード」⁵¹という独特の文法を明らかにしようとしている。このグハの分析によると、報告の部分は報告者の解釈を介すことで、単なる出来事の記録ではなく、何らかの意味が付されたかたちで書かれている。例えば、テキスト I において、反乱を起こした「農民」は「反乱者」と記され、「ムスリム」は「狂信者」に、「抵抗を示す行動」は「住民に対する最も向こう見ずでむちゃくちゃな残虐行為」に、「大地主に対する反乱」は「国家権威に対する反抗」に、そして植民地政府が容認する半封建的な無政府状態に代わる新しい秩序を求める行動は「公共の秩序を乱す行為」へとねじ曲げられて解釈された上で、報告されている⁵²。

さらにグハは、説明の部分が大半を占める記述では、この曲解がより色濃く出ることを指摘している⁵³。テキスト II において、サンタル反乱への「恐怖に鼓舞されて」この文章を書いた嘆願者は、「サンタル人が「ヨーロッパ人全員及び影響力のある土着の支配者を攻撃し……略奪し……殺そう」としており」、それにより「サンタルの神々の一人」が「インドのこの地域一帯を治める王になろうとしている」のだ」と、この反乱を説明することで、自らが抱える恐怖を「政治的に正当化している」とグハは論じている。続けてグハは、以下のようにこのテキストを批判している⁵⁴。

（前略）この記録は、目撃された事件に対する態度において中立的ではなく、歴史の法廷に「証拠」として提出されたとしても公平無私に証言するとは到底期待できない。反対に、これは献身的な植民地主義の声なのである。サンタル人によるダミン・イ・コーでの自治という展望と、イギリスによる支配の継続との間で、選択はすでに決まっていて、一方の推進にとっては良いこととして伝えられるものが、他方にとっては恐ろしく破滅的なこと（中略）として識別されるのである。

このように、記述の言説性——すなわち、権力と絡まった構造——を分析することで、グハは植民地主義的な偏向に基づく解釈によって「反―暴動のコード」がつくられてきたことを示している。

次に、第二言説については、それが記述された時代も場所も反乱からは遠く隔たっているために

⁵⁰ Ranajit Guha, op. cit., pp. 9–10.

⁵¹ Ibid., p. 19.

⁵² Ibid., pp. 13–14.

⁵³ Ibid., p. 14.

⁵⁴ Ibid., p. 14.

中立的で客観的な“歴史”として受容されてきたにもかかわらず、依然として「反―暴動のコード」に沿って書かれていることをグハは指摘している。その例として、W. W. ハンターが『ベンガル農民誌』に寄せたサンタル反乱についての文章を取り上げたグハは、ハンターが反乱を起こした部族民に対して同情心を持ちながらも、自由主義的帝国主義の立場から部族民を近代的な市場経済へ引き込むことによって反乱を防ぐという統治の視点で反乱原因の解明に臨んでいることを指摘している⁵⁵。そのため、グハによると、この歴史記述は帝国史という“大きな歴史”の文脈に沿って書かれており、「反乱や事件は帝国の歩みの中のデータとして記録されるが、暴動と称される意識というものが描かれることはなく、ゆえに「反乱者が反乱の主体として歴史に登場することはない」⁵⁶。こうして、グハは、従来の歴史記述にみられる歴史と権力の強い結びつきを描出している。第二言説の場合には、それがいかに中立的な“歴史”として描かれていようとも、あくまでも帝国主義の“大きな歴史”の文脈に即したものでしかなく、「反―暴動のコード」を基に構築されるエリート主義的歴史記述の伝統の中で描かれているといえる。

第三言説に関しても、「この歴史の空白を埋めようとはしない」とグハは論じる⁵⁷。その例としてシュプロカシュ・ライの『インドの農民反乱と民主的闘争』を取り上げたグハの分析によると、第三言説は、反乱者の視点を取り入れようとはするが、第二言説において帝国史の文脈で解釈されていたものを、解放闘争史の文脈で解釈し直しているだけである。そのため、労働者-農民という抽象的な理念上の概念を描き、反乱の主体であるはずの反乱者は、第三言説においても“大きな歴史”の構成要素でしかない⁵⁸。ゆえに、この言説は「反―暴動のコード」から逃れようとしてはいるが、逃れたいと宣言しているだけで、実際には囚われたままであるとグハは断罪している⁵⁹。

このグハの論考の中で実証的な歴史研究が展開されるのは、宗教こそが反乱の中心であったと論じられる箇所においてである⁶⁰。グハは、ライの文章で用いられた史料を読み直すことで、サンタル反乱のリーダーであったシドゥーとカヌーの動機や意識について、従来の解釈とは異なる新しい解釈を提示している⁶¹。それによると、第二言説にしろ、第三言説にしろ、「農民反乱の指導者が宗教を利用して農民を反乱に動員した」という誤った解釈に基づく歴史を描いているが、シドゥーとカヌーによって語られた言葉が民衆へ向けた公の言葉ではなく、植民地当局によって捕らわれた後の尋問官を前にした供述の言葉であったことから、彼らにとって宗教は大衆動員の道具などではなく、彼らの意識の根幹を成すものであった。グハは、従来の歴史記述が、宗教性に基づく農民の複雑な意識構造を理解できないために、農民反乱の――反乱する側にとっては――英雄的なリー

⁵⁵ Ibid., pp. 21–26.

⁵⁶ Ibid., p. 27.

⁵⁷ Ibid., p. 27.

⁵⁸ Ibid., p. 33.

⁵⁹ Ibid., p. 40.

⁶⁰ Ibid., pp. 34–36.

⁶¹ Ibid., pp. 34–39.

ダーを、人々を騙して利用する嘘つきに仕立て上げてしまうことを痛烈に批判している⁶²。

以上でみたとおり、グハは「反―暴動の文章」において、従来の歴史記述にみられる言説性——権力と絡まった構造、あるいは本稿第1章で触れた「イデオロギーとの「共犯の機能」」——を、批判的言説分析という手法をとることで明示している。インドの農民反乱を描く従来の歴史記述は、植民地主義的なものにしろ、反乱する側を支持する左翼的なものにしろ、反乱の主体である民衆の行動や意識をそれぞれの“大きな歴史”に当てはまるように曲解し、「反―暴動のコード」という偏った文法に則して記している。そして、そのコードは、植民地を支配する側や民衆を統治する側の意図によって構築され、したがって権力と密接に結びつくものであった。

2. サバルタンの歴史とマルクス主義史学における下からの歴史との差異

サバルタン研究は、欧米における社会史の流れに位置づけられる下からの歴史のアプローチと同様の試みとして紹介されることがある⁶³。たしかに、どちらも民衆に焦点を当てた歴史研究であるという点で共通している。しかし、チャタジーが明言するとおり、「サバルタン研究は決して「下からの歴史」とはなり得なかった」⁶⁴。エリート主義的歴史記述に対するグハの批判的な視座が“民衆”の曲解へと向けられていることは前述したとおりだが、一方の下からの歴史のアプローチでは、以下で考察するように、従来の歴史記述における“民衆”の無視が問題視されているといえる。また、この差異に伴う方法論的な違いもみてとることができる。ここでは、下からの歴史のアプローチにおける問題意識と研究手法を概観することで、サバルタン研究の独自性について検討する。

下からの歴史という言葉は、フランス革命の研究で知られるジョルジュ・ルフェーブルによって最初に用いられ⁶⁵、「大衆あるいは民衆の生活、活動、経験に注目することで、エリートあるいは支配階級からの歴史の視点にある程度とって替わるものを提示」する歴史研究の一潮流を指すが、ただし「その接近方法がさまざまで、実際には総称的名辞」であるといえる⁶⁶。そのため、下からの歴史の伝統のうちには多様な方法論や研究対象が含まれており、左翼的な関心に基づく研究から非左翼的なものまでが一括りにされている。そこで本稿では、グハと同様にマルクス主義的な見地に立ち、民衆に関心を寄せる歴史学者である、エリック・ホブズボーム及びエドワード・P・トムソンの研究に焦点を当て比較検討を進める。したがって、以下で考察する下からの歴史はあくまでも限定的なものであるが、それでも、グハによるサバルタン研究の独自性を考察するに当たっては、マルクス主義及び民衆への関心といった共通の見地からなされた研究を取り上げることにより、有

⁶² Ibid., p. 37.

⁶³ 例えば、前掲「インド近代史研究にみられる新潮流——「サバルタン研究グループ」をめぐる——」81頁。

⁶⁴ 前掲『サバルタン・スタディーズ』略史12頁。

⁶⁵ ハーヴェイ・J・ケイ（桜井清監訳）『イギリスのマルクス主義歴史家たち』白桃書房、1989年、255頁。

⁶⁶ 同上、252、255頁。

意義な比較検討が可能であると考えられる。『イギリスのマルクス主義歴史家たち』を著したケイは、ホブズボームやトムスンといったマルクス主義史家⁶⁷の一つの共通したアプローチの特徴として、「階級闘争分析」⁶⁸及びそれと「密接に結びつけるかたちで」なされた下からの歴史の試みへの貢献を挙げており⁶⁹、本項では、このケイによる考察を基に検討を進める。

ホブズボーム及びトムスンに代表されるマルクス主義史学が抱えた問題意識は、主として、当時のマルクス主義にみられた経済主義及びエリート主義に対する批判から読みとることができる。まず、トムスンは、経済主義を批判することでマルクス主義史学のあり方に一石を投じた⁷⁰。その批判によると、「マルクス主義の経済主義」による歴史認識は、「労働者階級の生成」を「きわめて単純に」、「蒸気力プラス工場制度イコール労働者階級」と考えており、産業革命以前の「平民意識」の存在や産業革命に伴う「新しい社会経験」に作用する「民衆文化」といったものを見過ごしている。トムスンは、そうした従来のマルクス主義史学が単純化して認識してきた「労働者階級の生成」について、その形成過程を歴史的に描出することが肝要であるとしている⁷¹。

また、ホブズボームの場合は、組織論や制度論に偏向していた一種のエリート主義的な労働史研究⁷²と、それに伴う労働者階級全体に対する過小評価を批判した。ケイは、「ホブズボームによる初期の労働史研究で、もっとも注目すべきことは、その研究の焦点を組織労働者から労働者階級全体の研究へと方向転換したことであ」り、その研究は「制度論や組織論をのり越えて、すべての労働者階級の経験の研究へと転換した」と評している⁷³。つまり、ホブズボームは、従来の労働史研究が見過ごしてきた「すべての労働者階級の経験」に光を当てることを試みたといえる。

以上のとおり、トムスンの場合は、経済主義に偏ったマルクス主義が「平民意識」や「民衆文化」の重要性を看過してきたこと、そしてホブズボームの場合は、制度論や組織論に偏向したエリート主義的な労働史研究が「労働者階級の経験」を見落としてきたことを批判した。したがって、両者ともに、従来の歴史記述にみられる意識的ないしは無意識的な“民衆”の無視に対して問題意識を抱えていたことが指摘できる。

⁶⁷ ケイは、ホブズボームとトムスンのほかに、モーリス・ドップ、ロドニー・ヒルトン、そしてクリストファー・ヒルを取り上げている。

⁶⁸ ケイの論じる「階級闘争分析」とは、「階級の静態的・非歴史的解釈」を否定し、「階級を歴史的関係および（傍点——原文ママ）歴史過程として検討する」アプローチであるとされている（前掲『イギリスのマルクス主義歴史家たち』262頁）。

⁶⁹ 前掲『イギリスのマルクス主義歴史家たち』6頁。

⁷⁰ エドワード・P・トムスン、ナタリ・Z・デイヴィス、カルロ・ギンズブルグ他（近藤和彦・野村達朗編訳）『歴史家たち』名古屋大学出版会、1990年、61頁。

⁷¹ 前掲『イギリスのマルクス主義歴史家たち』193-197頁。

⁷² 例えば、ウェッブ夫妻による労働組合運動史は、「組合指導者による運動理論と組合組織の発展史であり、この道筋から外れるかまたは把握し難いとみられた運動や理論、あるいは労働者や民衆は、軽視されるか無視され」ていた（古賀英雄「イギリスにおける民衆史の掘りおこし——ヒストリ・ワークショップとオーラル・ヒストリ——」『歴史評論』第375号、1981年7月、9頁）。

⁷³ 前掲『イギリスのマルクス主義歴史家たち』182頁。

次に、階級闘争分析及びそれに基づく下からの歴史の試みというアプローチに目を向ける。まず、『反抗の原初形態』⁷⁴において、ホブズボームは、「ロビン・フッド〈Robin Hood〉型の匪賊行為、農村での秘密結社、千年王国論に類するさまざまな農民革命運動、工業化以前の都市での『暴徒』と暴動、いくつかの労働宗派、それに初期の労働者組織と革命的組織にみられた儀礼の行使」といった「社会運動の『古典的形態』と名付けた運動」を取り上げて論じ⁷⁵、従来の歴史研究においては単なる「犯罪行為」あるいは「宗教的ヒステリー」としか認識されてこなかった運動の「政治性を掘り起こす」ことで、下からの歴史という視点に立つ階級闘争分析を進めた⁷⁶。ここで注意すべきことは、本来的には政治性を持つ重要な運動が歴史研究の中で過小評価されてきたというそのプロセス及び歴史記述の権力性そのものについては、関心が払われていないということである。グハが、前項でみたとおり、左翼的なものも含む従来の歴史記述における曲解に備わる権力性に注意を払い、批判的言説分析を行うことで従来の歴史記述を真っ向から否定したのに対し、ホブズボームによる研究は、従来の歴史研究の中で注目されることのなかった運動を取り上げることで、マルクス主義的歴史記述という“大きな歴史”の言説の精度を高める機能を果たしたと考えられる。

さらに、トムスンのアプローチをみると、徹底した階級闘争分析によるマルクス主義的歴史記述の構築がなされている。トムソンは、『イングランド労働者階級の形成』⁷⁷の執筆の目的と、「階級」に対する認識について次のように記している⁷⁸。トムソンが明らかにしようとしたのは、自身がわざわざ「諸階級ではなく階級と表現した（中略）理由」であり、その「階級」とは、「未加工の素材ならびに意識の双方における、異質で一見したところ関連のない、多くの出来事を統合する一つの歴史的現象」を示すものであるとされた。また、そうした「階級」の「概念は歴史的な関係という内容を含み」、その「関係」は「実在する人びとと実在する状況のなかに具現されている」ものであると論じられている。この「一つの歴史的現象」としての「階級」を描くために、トムソンは「農業労働者（field-labourers）、屋内労働者、職人の、一見したところ全くばらばらな経験や闘争」を取り上げ、そうしたばらばらな経験が「実際には共通の経験として共有されてきたということ」を明らかにしようとした⁷⁹。換言すると、トムソンは、複数の個別の歴史的事例を取り上げてそれらの内に共通の経験を発見することで、労働者階級の形成を描出しようとしたのであった。そのため、トムソンによる研究も、マルクス主義的歴史記述という“大きな歴史”の言説を否定するものではない。むしろ、経済主義に偏ったマルクス主義が見落としてきた「一見したところ全くばらばらな経験や闘争」を拾い上げ、詳細な歴史的検討を加えることで、この種の言説を強

⁷⁴ 原題は *Primitive Rebels*, 1959 年出版。

⁷⁵ 前掲『イギリスのマルクス主義歴史家たち』163 頁。

⁷⁶ 同上, 163-165 頁。

⁷⁷ 原題は *The Making of the English Working Class*, 1963 年出版。

⁷⁸ エドワード・P・トムソン（市橋秀夫・芳賀健一訳）『イングランド労働者階級の形成』青弓社, 2003 年, 11 頁。

⁷⁹ 前掲『イギリスのマルクス主義歴史家たち』202 頁。

化するものであったと捉えることができる。

したがって、下からの歴史のアプローチは、ホブズボーム及びトムスンといったマルクス主義史家によって展開されたものであっても、グハによる批判的言説分析という手法とは大きく異なるものであったことが指摘できる。チャクラバルティは、この点に関して、グハにみられるフランス構造主義からの影響の強さを指摘している⁸⁰。それによると、トムスンらによる社会史研究では群衆の中の個人の顔を描き出す試みがなされているのに対し、グハの構造主義的な捉え方では群衆の中の個人が顔を持たない（facelessness）という構造自体が論じられている。本節で示したとおり、下からの歴史は、民衆を主役として描きながらも、従来の“大きな歴史”が無視してきた部分を補完するというかたちでその言説を強化する役目を果たしているといえる。一方、グハが描こうとしたサバルタンの歴史は、支配と統治への関心から構築された歴史記述の権力と密接に結びついた構造を明らかにしようとするものであった。ゆえに、グハによるサバルタン研究は、従来の“大きな歴史”そのものを真っ向から否定するという意義を有するものであるといえる。

おわりに

本稿は、グハの批判的な視座及び批判的言説分析というアプローチを考察することで、サバルタン研究とはどのような研究なのか、またどのような意義を持つのかを検討した。グハは、南アジア近代史を構成してきたエリート主義的歴史記述を批判的に分析することによって、その言説性を明示した。また、グハが始動したサバルタン研究のプロジェクトは、エリートの欺瞞に対する幻滅や反感を源泉として、エリート主義的歴史記述が描いてきた“大きな歴史”に取って代わる闘争的な歴史記述を打ち立てようとした。そして、そうした批判性と闘争性を特性として持つサバルタン研究は、“民衆”を支配や統治の側とは逆の観点——従属する側（サバルタン）の観点——から解釈し直すことで、歴史を描き直す——サバルタンの歴史を構築する——試みであった。

このサバルタンの歴史は、本稿第2章第1節で触れた「反—暴動のコード」とは逆のコードで描かれることがグハの論考で示唆されている⁸¹。グハは、「反—暴動のコード」における「反乱者」、「狂信者」、そして「国家権威に対する反抗」といった言葉遣いを、それぞれ「農民」、「ムスリム」、「大地主に対する反乱」と読み直すことで、「暴動への支持を表明する」表現を提示し、こうしたコードは「物事をひっくり返す」というサバルタンの行動やそれを示す意識」といった能記（signifiers）から成るものであると述べている。

そして、この闘争的な歴史記述の主題とされるのは自律的な「民衆の政治」⁸²であるのだが、この「民衆の政治」というのは、グハによると、搾取や労働といった従属の経験から醸成される、エ

⁸⁰ Dipesh Chakrabarty, op. cit., p. 16.

⁸¹ Ranajit Guha, op. cit., p. 15.

⁸² Ranajit Guha [1994b], op. cit., p. 4.

リートへの抵抗の観念によって貫かれている⁸³。加えて、本稿で示したとおり、自律的であるはずの“民衆”は、エリート主義的歴史記述において曲解され“大きな歴史”の言説に利用される。したがって、グハが描こうとしたのは、単に階級的にエリートと差異をなす民衆でも、歴史の中で描かれてこなかった人々を意味する民衆でもなく、支配的なエリートと対峙する自律的な政治主体でありつつも、その自律性の源泉に従属の経験を持ち、さらにその自律的な政治行動——反乱や抵抗運動など——がエリートによって曲解され利用されることで歴史記述においてもサバルタンたらしめられる民衆であった。そのため、グハが描くサバルタン（＝民衆）は、複数の異なる従属-支配関係においてサバルタン（＝従属者）であるといえ、権力関係の複雑な構造自体をも示すものである。

最後に、サバルタン研究をめぐる重要な視座について触れておく。どれだけ従属の観点から「暴動への支持を表明する」コードを用いて歴史を描こうとしても、グハやサバルタン研究のメンバーが歴史学者というエリートの立場から“民衆”を解釈することには変わりはない。そこで、サバルタン研究それ自体の権力性をも批判するメタ的な視座が必要となる⁸⁴。グハは、批判的言説分析という手法によって、エリート主義的歴史記述による“民衆”の曲解という過ちを明らかにしたが、だからといってサバルタンの歴史を新たに構築しようとしても、それもありのままの事実を描きだすことにはなりえない。そのため、エリート主義を批判する自らの観点もまた相対化されなければならず、この自己相対化の視座こそ、サバルタン研究に求められるものであるといえる。グハは、このことを早くから自覚し、「反—暴動の文章」において次のように論じている⁸⁵。

歴史家の意識がその眼に埋め込まれている以上、そのような曲解をすべて消し去るために歴史記述にできることは何もない。それができることは、しかしながら、そうした曲解をパラメーター——曲解という行為それ自体の形態を決定するデータ——として認識し、過去の意識を完全に把握したり再構築したりできるとみなすことをやめることだ。

このように、グハは、サバルタンの歴史を構築することを宣言すると同時に、その試みの不完全さに対しても自覚的であった。だからこそ、実証的な歴史研究だけに頼ることでサバルタンの歴史を構築しようと試みるのではなく、批判的言説分析というアプローチに基づいた、批判性と闘争性を兼ね備えるサバルタン研究を展開したのだと考えられる。したがって、グハの学問的な態度から

⁸³ Ibid., p. 5.

⁸⁴ この視座に関しては、スピヴァクが重要な示唆を与えている。詳しくは、Gayatri C. Spivak, “Subaltern Studies: Deconstructing Historiography,” SS IV, 1985. また、スピヴァクの論点を解説したものとして、上村忠男「戦略としての歴史叙述——歴史のヘテロロジーのために（5）——」『思想』第90号、1999年を参照。

⁸⁵ Ranajit Guha, op. cit., p. 33.

は、研究自体に常に内在している研究者（自己）と研究対象（サバルタン）との権力関係を自覚することの重要性も学びとることができるのである。

この視座を政治学に応用するとどのような議論がもたらされるだろうか。例えば、デモクラシー論においては、次のような問いが立てられるだろう。すなわち、デモクラシーは、民・民衆・人民を主権者としつつも、統治の視点でその理論や制度を構築してはいないだろうか。もしくは、民・民衆・人民を、統治のコード——グハが示した「反—暴動のコード」のような、権力と強く結びついた独特の文法——を用いて描出してはいないだろうか。サバルタン研究の批判性と闘争性、そして自己相対化の視座は、学問研究に普遍的にみられる言説性——権力と強く結びついた構造——という看過し難い重大な課題を我々に突きつけているのである。

※本稿は JSPS 科研費 JP19J14229 の助成を受けたものである。